

第1話 美にはかたちがある

——明治美学と西欧美術の移植——

金 田 晋

比較文化学研究室

比較文化論の大きなテーマの一つに、文化の移植（＝翻訳）が異文化間でどのように遂行されたか、ということの検証がある。慶応年間から明治初頭にかけて、日本に移植された美学 Aesthetics の移植の過程も、そのようなテーマの一つとして理解している。

一般には、日本の知識人が西欧の舶来文化と内省的な反省意識との衝突の中から固有の美学が論じられるようになるのは明治も30年代になってからであり、明治初期は西洋学奨励の機運のもとでの場当たりの紹介であったと批判されている。だが西周や明六雑誌に掲載の論説等をつぶさに読んで行くと、当時の知識人たちが美の学に、芸術美の基礎理論ではなく、むしろ人間の生き方、社会的モラルの原理を求めていたことが仄見えてくる。明治の初めに、当時までの日本に欠如していた西欧の society の観念を日本に定着させていった福沢諭吉等の功業も、「社会」という訳語形成の経過によく反映している。けだし新しい美の観念は、一部の好事家の特権物ではなく、社会の規範意識として育ち始めたのである。

西周はオランダ留学から帰った年の翌年（慶応2年）、「百一新論」という講述を行なった。この講述は「エステチキ」とルビのふられ、「善美学」と訳された美学が日本の文献にはじめて登場した論文として知られる。そこでは善美学は人間社会の二つの形成原理の一方を担う価値規範の学とみなされていた。すなわち、どのような社会にも共通する普遍としての「法」とそれぞれの社会において別々の表情を示す特殊としての「教」とである。教は、ふつうキリスト教やイスラム教や仏教というふうにつかわれるが、より根源的に「モラル」、つまり生き方を示す語として理解すべきである。西が「善ト云フ考は、形ニ顕ハレタ物ト見ルト美ト云フ考ガ出」と言うとき、善は法に、形に顕われた物、美は教の一部ということになる。美醜を弁ずる能力は人間が人間として生き、社会生活を営む上で不可欠の能力である。

明治初期に求められた以上のような美学は、21世紀が始まった今もなお、有効である。